

*KCE*

*Kawaguchi Chamber Ensemble*

# 川口室内合奏団

## 第6回演奏会

2022年

1月29日(土)

13:30 開場

14:00 開演

リリア

音楽ホール

## ご挨拶

団長 山口尊実

本日は、川口室内合奏団第6回演奏会にご来場下さいまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、6回めの演奏会を開催することができました。重ねて御礼申し上げます。今回は、「6」にちなんだ曲を中心に構成しようと思ったのですが、いっそう難しくなってきました。(笑)

前半は、いつものようにバロックの世界をお楽しみください。ヴァイオリン・ソロでバッハを、次に、ヴィヴァルディの『四季』から『夏』です。(真冬ですが。。) 弦楽アンサンブルの世界へどうぞ。そして、今回もアルビノーニの2本のオーボエの協奏曲です。オーボエ2本の響きをお楽しみください。

後半は、ハイドンの交響曲第19番で幕開けです。そして、「6」に絡めて、26番「ラメントティオーネ」です。詳しくは解説をお読みください。後半最後のモーツァルトは、交響曲第6番です。当時の雰囲気を少しでも感じていただければ、と思います。どうぞお楽しみ下さい。

今回、「演奏するということ」、「演奏を聴くということ」について少々書いてみました。お時間あるときにご一読いただけたら幸いに存じます。

## Program

- J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンソナタ第2番より  
無伴奏ヴァイオリンソナタ第3番より  
A. Vivaldi 協奏曲第2番ト短調 RV315 『夏』  
T. Albinoni 2本のオーボエのための協奏曲 Op.9-9

<休憩>

- F. J. Haydn 交響曲 第19番 ニ長調  
F. J. Haydn 交響曲 第26番 ニ短調「哀歌」  
W. A. Mozart 交響曲 第6番 ヘ長調 KV43

## 音楽を演奏するということ



この楽譜を見て、「きらきら星！」と思ったあなた、ピアノをやったことがありますね？  
そうです。モーツァルトの「きらきら星変奏曲」<sup>1</sup>です。四分音符で始まり、お終いの直前に付点八分音符と16分音符がでてきて、二分音符で終わります。幼少期には、4分の2という拍子感や、「しぶおんぷ」<sup>2</sup>が「四分の一音符」であることなどには気づかず、おそらく大多数の人は「聞き覚え」で演奏したのではないのでしょうか。

さて、「演奏する」ということは、「楽譜を音にする」わけですが、そこにはいくつか問題があります。まず第一に、楽譜の表記には限界があるということです。私たちは「楽譜どおりに演奏する」ということを小さい頃から言われます。ややもすると、勝手に音を伸ばしたり、リズムもいい加減にやっちゃったり、強弱を見落としたり、勝手にやりやすいように演奏してしまって怒られ(あるいはやさしく指導され)たりします。

中上級者になってくると、楽譜に書いていないことを演奏しなければならなくなります。例えばヴィブラート。楽譜にはふつう「ここでヴィブラートを掛けよ」などとは書いてありません。<sup>3</sup>あるいは、音の立ち上がりやお終いの音の処理。オルガンのように音を伸ばすのか<sup>4</sup>、ハープのように消えゆくように演奏するのか。クレッシェンドと書いていないのに音を大きくしていく、あるいは、アツチェランドと書いてないのにだんだん速くする。あるいは逆に、だんだん小さくしたり、だんだん遅くしたりする。

この「楽譜に書かれていないこと」を演奏するのが「音楽を演奏すること」の重要な要素であると言っていいのではないのでしょうか。

しかし、この「楽譜に書かれていないこと」を私たちはどうやって知ればいいのでしょうか。現在、レコードやCDなどで様々な演奏を聴くことはできますが、モーツァルトやバッハの時代の演奏を聴くことはできません。<sup>5</sup> それではどうすればいいのでしょうか。専門の道に進み、脈々と受け継がれている技を習得するのが王道でしょうが、それは一部の人に限られてしまいます。幸いなことに、アーノンクール<sup>6</sup>やノリントン<sup>7</sup>のように、古楽演奏(ヴァイオリンの左右両翼配置)をする流れが私の生まれる前から出ていました。特にノリントンは、古典派、ロマン派でもヴィブラートなしで演奏します。<sup>8</sup>

「従来の演奏」に慣れてしまってる評論家や聴衆は批判的だったりしました。私も最初は違和感を感じてしまいましたが、後に、彼らの演奏は傾聴に値すると思うようになり、現在、彼ら同様、当時の音楽(に近いもの)をできるだけ再現しようとしています。今日、当時の姿からどんどんかけ離れていってしまった流れから、作曲家の意図に沿うような演奏が増えてきていると思います。

最後に、メトロノームについて一言触れたいと思います。メトロノームどおりに演奏することは、初学者にとっては重要であり、当然必須なのですが、中上級者にとっては、逆に邪魔になることが多々あるのです。フレーズの中で微妙な緩急を付ける必要があるのです。「書かれていないこと」を理解し、表現しようとする、メトロノームが邪魔になることがあるのです。「メトロノームは必須、しかし、時に邪魔になる。」二律背反のようなこの問題はなかなか難しく、葛藤は続きます。

## 音楽を聴くということ

250年前、スマホもちろん、テレビも電話もありません。娯楽の一つは生の音楽演奏会。チラシが配られ、曲名が書いてある。「10歳の神童が交響曲を書いた?!ぜひ聴いてみたい!」

音楽を楽しみにしていた人たちは、演奏会のチラシを見て、「次はどんな曲を書いたのだろう?」とワクワクしていたことは想像に難くありません。音楽を録音する術もない時代で、放送もありません。生演奏で初めてその曲を知り、感動したり残念に思ったりしたことでしょう。そして、音の記録はなく、記憶だけが残ります。

さて、実は私も、当時のその感覚を皆さんに味わってもらおうと思っていたりします。「モーツァルトの次の交響曲はどんな曲だろう?」「次のハイドンの交響曲は何だろう?」と、『未知の体験』にワクワクして演奏会に足を運んでもらいたい、そんな思いもあります。<sup>9</sup>

もちろん、ヴィヴァルディの『四季』のようにすでに有名になってしまっている曲についてはそのような初体験のワクワク感はもう味わえないわけですが、こちらは、いろいろな演奏があり、その違いを味わっていただけたらと思います。

アマチュアあるあるかもしれませんが、ある曲を聴いたときに「これは〇〇指揮の〇〇管弦楽団、〇〇年の演奏だ!」と瞬時に分かる人もいるようで、私も中学生の頃は、その端っこというか後ろにくっついていたこともありました。<sup>10</sup> クイズ的知識、ですかね。

小学生の時に、地図帳もって、「地名クイズ」のようなことをやっていました。できるだけわかりにくいものを探して、友人に答えさせるというやつ。「シエラネバダ山脈」とか「アンデス山脈」とか。まあ、そのようなクイズ的な楽しみも若ければこそですが、今思えば、音楽においてそのクイズ的な知識はあまり意味がなかったかなとも思います。<sup>11</sup> (もっとも今となっては記憶力そのものが危ういですが。。)

さてさて、一度演奏を聴くと、良かれ悪しかれそれが「基準」になってしまいがちです。私が子どもの頃、山本直純指揮の『運命』<sup>12</sup>やハンガリー舞曲第5番<sup>13</sup>を聴いて、そのテンポの揺らしが面白いというか楽しく「感じて」していました。彼の業績を否定するつもりは毛頭ありませんし、むしろ賞賛に値すると思っっているのですが、純粋に音楽を考えたとき、負の面のほうが気になってしまう「大人」の自分がここにいます。<sup>14</sup>

デフォルメが強い音楽に慣れ親しんでしまうと、当時のスタイル(ピリオド奏法)に接すると、物足りない、と感じてしまうかもしれません。(あるいは逆に、「これはいい!」と感じるかも?)

年月の流れとともに少しずつ変化して行って、多少誇張気味のスタイルが主流になっているとしても、ふと立ち止まって、古き良き時代というか、作曲された当時の雰囲気演奏したい、演奏を聴きたい、そんな思いがでてきてしまっってはや〇〇年。みなさんはどうお思いでしょうか。

次回演奏会も来ていただけたら、「予習」をせずに、「次はどんな音楽だろう?」と思いながら足を運ぶのもまた一興かと思えます。よろしかったらお試し下さい。<sup>15</sup>

## 注

### 「音楽を演奏するということ」

- \*1 原題は、"12 Variationen über ein französisches Lied "Ah, vous dirai-je, maman"。ヴォルフガングが22歳の時に作曲したピアノ曲。直訳は、『フランスの歌曲「ああ、お母さん、あなたに申しませう」による12の変奏曲』。最近、幼稚園等で、"Twinkle twinkle little star..."「きらきらひかるー…」はやらないのですか？
- \*2 「しぶおんぷ」とも「しぶんおんぷ」とも言うが、「四分の一」を意識したのはいつだったろうか？英語では、"quarter note"なので、「四分の一」ということが子どもでも分かっただろうに。。。
- \*3 ヴィブラートについては、別の機会に。一言だけ、「そのヴィブラート、必要ですか？」
- \*4 よく「羊羹」という表現が使われることがあるが、実際には、音の立ち上がりは多くの場合軽いアクセントがつくものだ。(羊羹もう何十年も食べてないなあ。)
- \*5 エジソンが蓄音機を発明したのは1878年。
- \*6 ニコラウス・アーノンクール (Nikolaus Harnoncourt) 1929年12月6日～2016年3月5日。オーストリアの指揮者。1953年にはアリス夫人らとともに古楽器オーケストラ「ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス」を立ち上げる。(演奏会デビューは1957年)
- \*7 サー・ロジャー・アーサー・カーヴァー・ノリントン (Sir Roger Arthur Carver Norrington, 1934年3月16日～) イギリスの指揮者。時代楽器や時代様式を用いたバロック、古典派、ロマン派音楽の演奏で知られる。1978年にロンドン・クラシカル・プレイヤーズ (古楽器) を設立。1997年シュトゥットガルト放送交響楽団 (モダン楽器) の首席指揮者に就任。ともにピリオド奏法。
- \*8 ノリントン曰く「ピュアトーン」。ノンヴィブラートに慣れると、「不要不急の」ヴィブラートがとても気になるようになってしまいます。個人的には、テンポ感もノリントンの演奏が好きです。デイヴィッド・ジンマン (David Zinman, 1936年7月9日～アメリカ) もいいですね。パーヴォ・ベルグルンド (Paavo Allan Engelbert Berglund, 1929年4月14日- 2012年1月25日フィンランド) も！

### 「音楽を聴くということ」

- \*9 すでにいろいろご存じの方には申し訳ないのですが、その場合は、演奏の違いを楽しんで下さい。
- \*10 ブ람スの交響曲やストラビンスキーの春の祭典は、当時入手できた演奏はほぼ頭に入って、一部を聞いただけで指揮者と演奏家は分かるようになっていました。(その分勉強の記憶力が……)
- \*11 もちろん、知識が増えることはいいことです。。。
- \*12 冒頭の「じゃじゃじゃじゃーん」のフェルマータをととても長くしたり、4楽章冒頭をゆっくり始めて、アレグロにしたり。
- \*13 中間部の poco rit (少し遅く) を、ものすごく遅くしたり。
- \*14 「巨匠」レオポルド・ストコフスキーは、オーケストラの配置をストコフスキーシフト (高弦から低弦と並べる) にしてしまい、流行ってしまいました。(1965年、日本フィルハーモニー管弦楽団のチャイ5の最後の部分の演奏が youtube にあります。お時間ありましたらぜひお聞き下さい。)
- \*15 気に入ったら、「復習」でネットで聴いてみるとか、プロの演奏を聴いてみるとか、後でいろいろできますし！

# Johann Sebastian Bach

1685 ～ 「アイゼナハ時代」 3月31日、大音楽家の末子として生まれる。

1695 ～ 「オールドルフ時代」 両親が没し、長兄に引き取られ、オールドルフへ。

1700 ～ 「リュネブルク時代」 北ドイツリュネブルクで教会付属学校給費生に。

1703 ～ 「アルンシュタット時代」 ヴァイマル宮廷楽師兼従僕、新教会オルガニストに。

1707 ～ 「ミュールハウゼン時代」 マリア・バルバラと結婚、7人の子どもをもうけた。

1708 ～ 「ヴァイマル時代」 現存するオルガン曲の大半を作曲。イタリアの影響を受けた。

1717 ～ 「ケーテン時代」 『ブランデンブルク』、『無伴奏ヴァイオリン』等室内楽を作曲。

1720 年妻と死別し、翌年再婚。後にモーツァルトに大きな影響をあたえた末子ヨハン・クリスティアンを含む13人の子どもをもうけた。

1723 ～ 「ライプツィヒ時代」 ライプツィヒでトーマス教会カントルに就任。『マタイ』、『ヨハネ』などを作曲。『ロ短調ミサ曲』を完成後視力を失い、『フーガの技法』未完のまま1750年7月28日没。65歳。

## 無伴奏ヴァイオリンソナタ

1720年、35歳でケーテン宮廷楽長の職に就いたバッハは、音楽好きの君主レオポルドに仕え、多くの楽曲を作曲した。「無伴奏ヴァイオリンソナタ」「無伴奏ヴァイオリンパルティータ」を作曲したのはこの時期である。

無伴奏ヴァイオリンソナタは3曲あり、すべて教会ソナタの形式で、緩徐楽章と急速楽章が交互に並んでおり、2曲目にフーガが置かれている。

今回は、第2番の3、4楽章と、第3番の3楽章をお届けします。

## 第2番 a -moll BWV1003 より

### 3楽章 Andante 3/4拍子

短調のソナタの中で唯一の長調（Cdur）で、1楽章の Grave、2楽章の少し長めのフーガの後で、ほっとする楽章である。アンダンテ<sup>16</sup>の意味のとおり、ずっと歩いていく感じが伴奏パートで表されているのだが、主旋律と伴奏のパートを一人で奏でるので、バランスをとるのが難しい。掛留音<sup>17</sup>によって不協和音が作られ、それがこの曲の魅力となっている。



#### 4 楽章 Allegro 2/2 拍子

軽快に駆け抜ける二拍子のアレグロ<sup>\*18</sup>の曲で、舞曲の要素が含まれている。強弱記号の記載が少ないバッハの曲のなかで、この4楽章には強弱記号が書いてあり、その対比を強調したい。



### 第3番 C dur BWV1005 より

#### 3 楽章 Largo 4/4 拍子

1 楽章 Adagio、2 楽章の壮大なフーガの後にくる、下屬調である F dur の楽章で、幅広いラルゴのリラックスできるとてもきれいな楽章である。この曲も旋律パートと伴奏パートを一人で弾くのだが、2 番とは異なり、伴奏パートは休符が多くなっている。



注

\*16 andante は andare の現在分詞。(英語であれば、go → going)

\*17 掛留音は、非和声音の一つで、他には、刺繍音、経過音、倚音、先取音、逸音、保続音がある。掛留音は、文字どおり、前の音が伸び一瞬「不協和音」となり、その後「協和音」として解決する手法である。

\*18 allegro は「陽気な、快活な」というイタリア語。厳密には「速い」という意味ではないが、快活に明るく演奏するとなると、やや速くはなるだろう。(「速い、速く」は presto)

## A. Vivaldi 『和声と創意への試み』 より

### 協奏曲第2番ト短調 RV315 『夏』

Antonio Lucio Vivaldi (アントニオ・ルチオ・ヴィヴァルディ) は 1678 年 3 月 4 日ヴェネツィア生まれ。ヴァイオリニスト、音楽教師、司祭、興行師、劇場支配人であった。父親からヴァイオリンを学び、10 歳より教会附属の神学校に入るとともに見習いヴァイオリニストになり、25 歳で司祭に叙階された。1741 年 7 月 28 日ウィーンにて没。

一般に、「四季」で有名なこの一連の曲は、「春・夏・秋・冬」でワンセットのイメージがあるが、実際には、『和声と創意への試み』と表記される全 12 曲で構成されている。1724 年から 1725 年頃にアムステルダム of the publisher R. C. Neumeister から 6 曲ずつ 2 巻に分けて出版された。その中の、第 1 曲から第 4 曲が「四季」(伊: Le quattro stagioni、英: The Four Seasons) である。各曲はそれぞれ 3 つの楽章から成っており、各楽章にはソネット(詩)が付いている。ソネットの作者は不明であるが、ヴィヴァルディ自身の作という説もある。

#### 第 1 楽章

LANGUIDEZZA PER IL CALDO  
Sotto dura staggion dal sole accesa Languè l'huom, languè 'l gregge, ed arde il Pino;  
Allegro non molto



LANGUIDEZZA PER IL CALDO

LANGUIDITY FOR THE HEAT

暑さで元気がない

Sotto dura staggion dal sole accesa Languè l'huom, languè 'l gregge, ed arde il Pino;

The man languishes under the harsh season of the sun, the flock languishes and the pine tree burns

男は太陽の厳しい季節の下で元気がなくなり、群れも元気がなくなり、松の木が燃える

#### IL CUCCO

Scioglie il cucco la voce,

Allegro e tutto sopra il canto



IL CUCCO

THE CUCKOO

カッコー

Scioglie il cucco la voce,

Unite the voice of the cuckoo

カッコーの声とともに

e tutto sopra il canto

and all over the singing



LA TORTORELLA  
e tosto intesa  
Canta la tortorella e'l gardelino.



LA TORTORELLA

TURTLEDOVE

コキジバト

e tosto intesa

and soon understood

Canta la tortorella e 'l gardelino

Sing the turtledove and the gardelino

コキジバトとゴシキヒワが歌う

IL GARDELLINO

75



ZEFFIRETTI DOLCI  
Zeffiro dolce spira,



ZEFFIRETTI DOLCI

甘い西風

Zeffiro dolce spira,

sweet Zephyr blows

甘美なゼファーが吹く

※ゼピュロス 西風の神 (ギリシャ神話)

VENTI DIVERSI

ma' contesa. Muove Borea improvviso al suo vicino;



VENTI DIVERSI

DIFFERENT WINDS

異なる風

ma' contesa muove Borea improvviso al suo vicino

しかし突然ボレアス (北風の神)

But contention moves Borea suddenly to his neighbor

が戦いを始める

IL PIANTO DEL VILLANELLO  
E piange il Pastorel, perchè sospesa Teme fiera borasca e 'l suo destino.

The musical score consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a key signature of two flats (B-flat and E-flat) and a common time signature. It begins with a piano (*pp*) dynamic marking. The lower staff is in bass clef with the same key signature and time signature, also starting with a piano (*pp*) dynamic marking. The melody in the upper staff is characterized by a series of eighth and sixteenth notes, often beamed together, creating a sense of continuous motion.

IL PIANTO DEL VILLANELLO

THE WEeping OF THE VILLANEL

泣きの場面

piange il pastorel, perchè sospesa teme fiera borasca, e 'l suo destino;

The shepherd weeps, because the fair borough fears suspended, and its destiny;

羊飼いは泣く 激しいスコールとその運命に

第2楽章

Toglie alle membra lasse il suo riposo Il timore de' Lampi, e tuoni fieri E de mosche, e mosconi il stuol furioso!

Adagio Presto

The musical score is divided into two parts. The first part is marked 'Adagio' and features a melody in the upper staff with a mezzo-forte (*mf*) dynamic. The second part is marked 'Presto' and features a rhythmic accompaniment in the lower staff with a piano (*p*) dynamic. The lower staff contains two distinct rhythmic patterns: 'MOSCHE E MOSCONI' and 'TUONI', both consisting of rapid sixteenth-note passages.

Toglie alle membra lasse il suo riposo Il timore de' lampi, e tuoni fieri E de mosche, e mosconi il stuol furioso!

Takes away his rest the fear of lightning, of fierce thunder, And flies and blowflies, the furious crowd!

稲妻と激しい雷の恐怖が彼の安らぎをすべて奪う ハエ、羽虫、イライラする群れ!

第3楽章

TEMPO IMPETUOSO D'ESTATE  
Ah che pur troppo i suoi timor son veri. Tuona e fulmina il ciel e grandinoso Tronca il capo alle spiche e a' grani alteri.

Presto

The musical score is a single staff in treble clef with a key signature of two flats and a 3/4 time signature. It is marked 'Presto' and begins with a forte (*f*) dynamic. The melody consists of a series of eighth notes, creating a driving, rhythmic effect.

TEMPO IMPETUOSO D'ESTATE

TEMPO IMPETUOUS SUMMER

激しい夏のテンポで

Ah che pur troppo i suoi timor son veri: Tuona e fulmina il ciel, e grandinoso Tronca il capo alle spiche e a' grani alteri.

Ah that too much his fears are true: it thunders and lightens the sky, and hastily cuts off the head of the spikes and the proud grains.

ああ、彼の大きすぎる恐怖はまさに現実となった。雷鳴は轟き、稲光は空を照らし、雹が瞬時に、穀物の穂先をへし折り、穂を切り落とす。



激しく一気に終了する。

(訳出は、DL 翻訳を参考にしました)

(2楽章で、手元にあるスコアでは mossoni という語がなかなか訳せず、imslp のスコアを見て、

mosconi の間違いだというのに気づきました。けっこう時間がかかってしまった。。)

## T. Albinoni 2本のオーボエのための協奏曲 ハ長調

Concerto for 2 Oboes in C major, Op.9 No9

トマゾ・ジョヴァンニ・アルビノーニ (Tomaso Giovanni Albinoni) は、イタリア (ヴェネツィア共和国) のバロック音楽の作曲家、ヴァイオリニスト。1671年6月8日ヴェネツィアに生まれ、1751年1月17日に没した。J.S.Bachが1685年3月31日～1750年7月28日なので、ほぼ同時代を生きていた。バッハもアルビノーニの音楽をよく知っており、3曲のフーガ (BWV946, 950, 951/951a) でアルビノーニの主題を使用しているほか、生徒の和声の練習にアルビノーニの通奏低音の進行をよく利用した。アルビノーニは生前52ほどのオペラを作曲していたが、大半が紛失しており残念な限りである。

この2本のオーボエのための協奏曲は、1722年に発表された「12曲の五声の協奏曲集」(作品9、伊: 12 Concerti a cinque) 中の1曲である。その12曲の内訳は、ヴァイオリン協奏曲が1番、4番、7番、10番の4曲、オーボエ協奏曲が2番、5番、8番、11番、そして、2本のオーボエのための協奏曲が3番、6番、9番、12番となっている。<sup>\*19</sup>

### 第1楽章 Allegro 4/4 拍子



お約束の?リトルネッロ形式で、弦楽合奏のハ長調の分散和音始まり、



もう一つのモチーフが奏でられ、

その後2本のオーボエが入ってくる。



その後、これまたお約束の属調に転調する。(ハ長調→ト長調→イ短調)



その後、展開していく。オーボエ2本の動きをお楽しみ下さい。

その後、お約束の?再現をするのだが、前回の9-3同様、「拍がずれている」。このずれに



気づいた人は音大に行ける!かも?

最後は、あっさり終了する。

第2楽章 Adagio 3/4 拍子



平行調のイ短調となり、  
ヴァイオリン→オーボエ  
とカノン風に進行してい  
く。  
(←上から ob1,ob2,vn1,vn2)



ここでも掛留音が確認で  
きる。(タイのかかっている音)

この2小節めはイ短調のIの和音(ラドミ)だが、ここに、前の小節の最後の音「シ」が掛留し、緊張感のある和声を作っている。(このあとも何度も出てくるので、楽しんで下さい)



終わったと見せかけ、1拍の全休止ののち、I→II→I→V→I→IV→Vと半終止で終わる。  
※ I : ラドミ II : シレファ IV : レファラ V : ミソ#シ

第3楽章 Allegro 3/8 拍子

ハ長調、リトルネッロに戻り、アウフタクトからカノン風に始まる軽快な曲。



弦楽合奏ののち、2本のオーボエが入り、軽快に進んでいく。

1楽章同様、途中で属調のG-dur(ト長調)になり、平行調のe-moll(ホ短調)に転調し、再現する。



この最後の部分だが、何かお感じになりませんか?

## Franz Joseph Haydn フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

1732年3月31日、オーストリア生まれ。1809年5月31日ウィーンにて没。「交響曲の父」と言われていることは有名だが、ソナタ形式を確立したことが大きいと私は思っている。初期の交響曲は、ソナタ形式を模索しているようにも思える。

### 交響曲第19番ニ長調 Hob.I-19

1757/58年にモルツィン伯爵の音楽監督に就任したハイドンだが、この19番がいつ作曲されたかについては諸説ある。ホグウッド版の全集では、第2巻(c.1760-63)は「ウィーンからエステルハージ家へ」に収めている。一方、ヘンレ社刊行のハイドン研究所による新全集では、第1巻(1757-1760/61)に収めている。どちらに分類するか、研究者に任せるとして、いずれにせよ、1760年頃に書かれた作品である。

#### 第1楽章 Allegro molto ソナタ形式

##### 提示部



明るいニ長調で「とても快活に」始まる (Allegro molto)。(18小節からの係留がいい。)



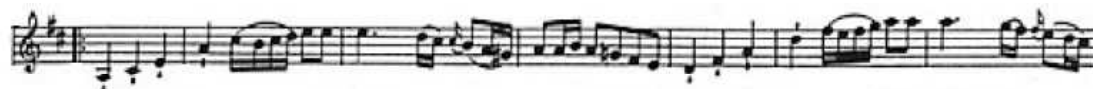
この掛け合いのニ長調の第2テーマはあっさり終わる。



← Hr ホルンの合図とともに  
コデッタ(小結尾)へ。

← Vn

##### 展開部



ニ長調→ニ長調→……と展開していく。



2ndVnから始まる第二テーマがちよろっと顔を出し、さらに展開していく。





ホルンの合図とともに展開部が終了し、再現部へ。



ニ長調の第 2 テーマが、提示部同様の掛け合いで顔を出し、約束のホルンの合図とともにコーダへ。

### 第 2 楽章 Andante ソナタ形式



アウフタクトで始まるもの悲しいニ短調の第 2 楽章。



vn2 第 2 テーマは、低弦の下降音型に 1st ヴァイオリンとヴィオラのオクターブのシンコペーション、遅れて 2nd ヴァイオリンのシンコペーションの下降音型が加わる。なかなか面白い。  
va  
vc, DB



コデッタの掛け合いもなかなかお洒落？



vn2 再現部では第 1 テーマはがちよろっと顔を出したのちに転調し、第 2 テーマが低弦で 6 度上、2nd ヴァイオリンでは 3 度下で出てくる。  
va  
vc, DB その後コーダを迎える小曲であるが、なかなか趣き深い曲である。

### 第 3 楽章 Presto ソナタ形式



ニ長調に戻り、軽快に進んでいく。

のちに、属調 (イ長調) の第 2 テーマが顔を出し、小結尾へ。そして、展開し、再現部へと。ニ長調の第 1 テーマと同じくニ長調になった第 2 テーマが出て、コーダへと向かう。

## 交響曲第 26 番ニ短調 "Lamentatione" 「哀歌」 Hob.I-26

この作品の自筆原稿は残っておらず正確な作曲年代は不明である。3 楽章構成であることもあり、かつては初期の 1765 年から 1766 年頃の作品とされていたが、様式などの研究により、現在では 1768 ～ 69 年頃の作品と考えられるようになった。いわゆる「シュトゥルム・ウント・ドラング期」にあたり、この時期には短調の交響曲が多数作曲された。

### 第 1 楽章 Allegro assai con spirito ソナタ形式

#### 提示部



力強い低弦に乗って、シンコペーションで第 1 テーマが奏でられる。

モーツァルトの 25 番を彷彿とさせられるが、25 番は 1773 年 10 月 5 日作曲である。



第 2 テーマが顔を出し、へ長調のコラールへと続く。



Chorale

オーボエの 2nd とヴァイオリンの 2nd によるメロディで、1stvn は分散和音。  
その後、コデッタとなり、リピートされる。

#### 展開部



へ長調となった第 1 テーマから展開していく。



第 2 テーマが顔を出し、f となってシンコペーションでさらに展開していく。

#### 再現部

その後、提示部と全く同じ第 1 テーマ、第 2 テーマが再現し、



転調して、ニ長調のコラールとなる。

コーダでは管と弦の掛け合いがあり、リピートせずに終結する。



## 2 楽章 Adagio ソナタ形式



G 線上のアリアを彷彿とさせる低弦の分散和音に、オーボエと 2nd ヴァイオリンがグレゴリオ聖歌のグレゴリオ聖歌の「エレミヤの哀歌」のコラールをへ長調で奏でる。



1st ヴァイオリンの対旋律が 16 分音符の 3 連符に変わり、



メロディと低音の動きを紡いでいく。ここでは、メロディが属調のハ長調になっている。

短い展開部の後の再現部からはホルンも主題を奏でる。再現部では、2nd ヴァイオリンも 16 分音符の 3 連符となる。

## 第 3 楽章 Menuet - Trio ニ短調 - ニ長調



ニ短調で始まる物悲しいメヌエツト。へ長調に転調してリピート。



後半は、 $f \rightarrow p$ を繰り返し、静かなメロディの力強いカノンを経て、静かに終わる。

## Trio



ニ長調に転調し、「びっくり交響曲」(交響曲第 94 番ト長調 Hob.I:94、『驚愕』、英: The Surprise, 独: Mit dem Paukenschlag) を思い起こさせる。

## Wolfgang Amadeus Mozart ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

1756年1月27日ザルツブルク生まれ。3歳からチェンバロを弾き始め、5歳のときに最初の作曲を行う（アンダンテ ハ長調 K.1a）。8歳の時交響曲第1番を初演（1765年2月21日）<sup>\*20</sup>。1791年12月5日、35歳で没。晩年の次の言葉をぜひ紹介したい。

「ヨーロッパ中の宮廷を周遊していた小さな男の子だったころから、特別な才能の持ち主だと、同じことを言われ続けています。……中略……長年にわたって、僕ほど作曲に長い時間と膨大な思考を注いできた人はほかには一人もいません。有名な巨匠の作品はすべて念入りに研究しました。作曲家であるということは精力的な思考と何時間にも及ぶ努力を意味するのです」<sup>\*21</sup>

### 交響曲 第6番 ヘ長調 KV43

1767年の12月頃にウィーンまたはオルミュッツ（オロモウツ）で作曲され、モーツァルト11歳の時の作品である。ウィーンからオルミュッツへ往復していた時期に作曲されたと見られている。天然痘から回復してからすぐに作曲された（らしい）。

#### 第1楽章 Allegro ソナタ形式

※楽譜のスタカートはすべて楔 ↓



ユニゾンのヘ長調の第1テーマで始まり、



Vの半終止ののち、低弦がテーマを展開していく。



ハ長調の第2テーマが2nd ヴァイオリンとヴィオラにて始まり、経過を経てコデッタへと進んでいく。

#### 展開部



イ長調で始まり、短い展開をする。

#### 再現部



第1テーマは省略され、第2テーマがヘ長調になって再現する。

\*20 「年齢詐称疑惑」もある。（レオポルドの示唆があったという「噂」も…。）

\*21 ドノヴァン・ビクスレー『素顔のモーツァルト』清水玲奈訳、グラフィック社、2005年

## 第2楽章 Andante ソナタ形式？

旅行に出発する前の年の1767年春に作曲したラテン語によるオペラ『アポロとヒュアキントゥス』K. 38の第8曲の二重唱から転用されている。



オーボエに代わってフルートが登場する。1st ヴァイオリンが弱音器を付けハ長調の旋律を歌う。低弦と2nd ヴァイオリンはピチカート、2本のヴィオラは16分音符で分散和音。

## 第3楽章 Menuetto - Trio ヘ長調 - 変ロ長調



下降音型で始まるメヌエット。後半は上昇音型となり、その対比がわかりやすい。

### Trio



変ロ長調に転調し、弦楽合奏のトリオ。



後半は力強い低弦のメロディが登場し、静かに終わる。

## 第4楽章 Allegro ソナタ形式？

### 提示部



ヘ長調の第1テーマの後左右対向の動きが。



オーボエの下降にこの両vnの動き

### 展開部～再現部



ヘ長調で始まり、少しの展開の後、ユニゾンが現れ、第2テーマが再現する。

第1テーマを省略した再現部のような、まだ展開部の途中のような流れとなり、コーダに向かう。

## Vn solo & コン・ミス 藤本舎里

3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめ。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第2位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演のほか、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

## オーボエ・指揮 山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Oboe:LF、D'amore & EH:Bulgheroni  
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving (Resuce Diver)、数学、バドミントン etc.

## オーボエ 大山明子

中学校の吹奏楽部にてオーボエを担当。その後、10余年のブランクを経てアマチュアオーケストラを主軸に活動を再開。プラハ・ドヴォルザークホールにて小林研一郎氏と共演。柳澤寿男氏が音楽監督を務めるバルカン室内管弦楽団と共に「第九」を演奏し好評を博す。オーボエ、イングリッシュホルンを池田昭子氏 (NHK 交響楽団) に師事。  
楽器：Oboe:MarigauxM2, English Horn、F.Loree i+3 Low Bb 趣味：麻雀、ダム巡り

## member

vn 藤本舎里, 伊藤温子, 大西由梨, 松尾沙樹, 山田友香子, 渡邊昭子

va 伊藤恵, 高橋良暢 vc 大和伸明 cb 森田章

ob 大倉淳, 大山明子 fl 藤原美夏, 門傳美智子 hr 林義昭, 松沢宗一郎

cond,ob 山口尊実

◎団員募集しております。詳細はHPにて!

## 第7回演奏会のお知らせ

2022年11月5日(土) 13:30 開場 14:00 開演 リリア音楽ホール

曲目(予定) J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンパルティータ第2番より

A. Vivaldi 「和声と調和の試み」より 第3番「秋」

J. S. Bach オーボエダモーレ協奏曲 in A

F. J. Haydn 交響曲 34番、交響曲第59番、W. A. Mozart 交響曲第11番



HP : <http://kce.saitama.jp>

mail : [bur@kce.saitama.jp](mailto:bur@kce.saitama.jp)

